

東京大学

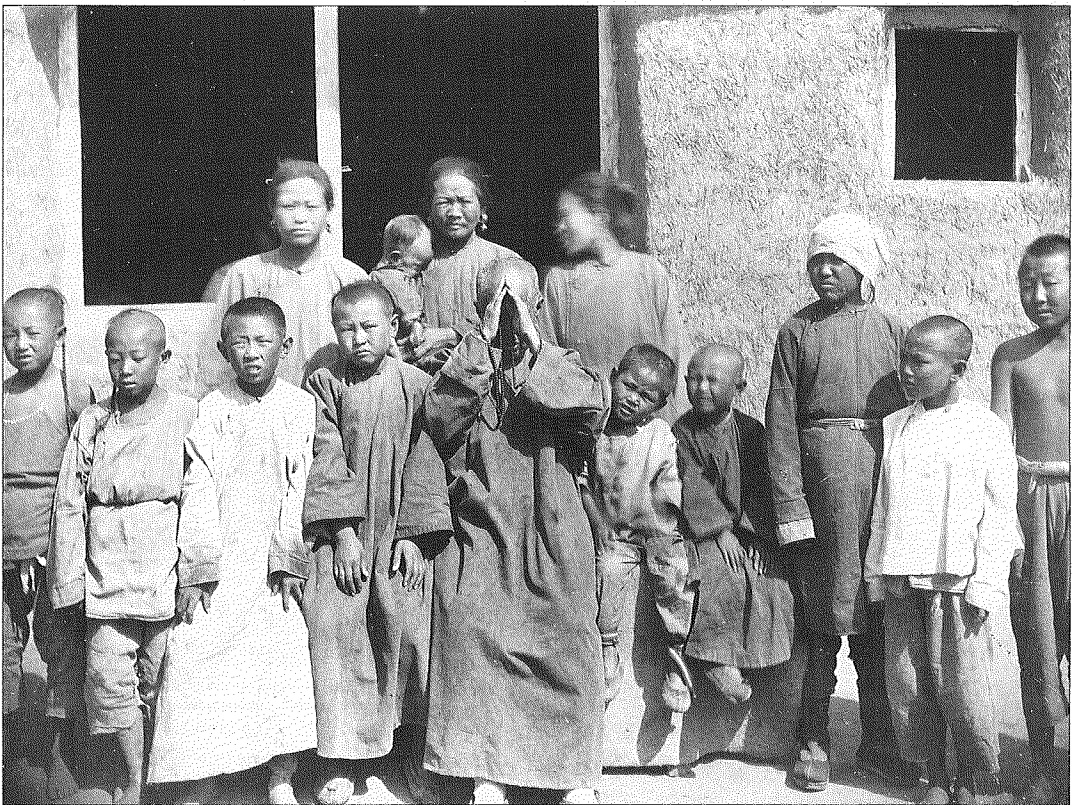
総合研究資料館ニュース

21号

東京大学総合研究資料館
The University Museum

1991.2.1

鳥居龍蔵写真乾板の再生



満州族の農民、明治38年（1905）鳥居龍蔵撮影、撮影地点不明。

当時写真撮影の困難のひとつは、人々が写真を恐れて逃げ出してしまうことにあった。

この老人はカメラの前に立たされて、思わず拜んでしまった。

鳥居龍蔵は明治3年（1870）、徳島市の裕福な商家の次男として生まれる。少年時代、学校生活に馴染めず小学校を中途退学するが、生来知識欲は高かったため、いろいろな先生について中学までの課程を独学修了している。

明治21年（1888）、18歳の時、後に東京帝国大学理科大学人類学講座初代教授となる坪井正五郎が徳島の鳥居の家を訪ねた。鳥居はすでに、その2年前に坪井らにより創設された東京人類学会の会員となっていたが、この坪井との出会いが人類学を本格的にはじめるきっかけとなったことは間違いない。その後坪井との交流を通じて鳥居の人類学への情熱はますます高じ、ついに明治25年（1892）、徳島の家をたたんで一家をあげて上京することになる。上京の翌年、坪井が主宰する人類学教室の標本整理係となる。坪井29歳、鳥居23歳のことであった。

鳥居は坪井の指導のもとで人類学を研鑽するかたわら、理科大学では箕作佳吉の動物学、飯島魁・渡瀬庄三郎の進化論、横山又次郎の古生物学、神保小虎・小藤文次郎の地質学を、医科大学では小金井良精の解剖学、大沢岳太郎の発生学などを聴講して幅広い知識の吸収に努めた。そのかいあって明治31年、同教室の助手（28歳）に任命される。その後、講師（35歳）を経て、大正2年（1913）坪井がペテルブルグで客死すると、その後継者として人類学教室を主宰する。大正11年（1922）には学位をうけて助教授となるが、2年後に辞職している。

その後は國學院大学、上智大学教授を歴任し、昭和14年（1939）、中華民国北京燕京大学から招へいされて客員教授に就任した。戦争勃発で大学が閉鎖された後も引き続き在留し、終戦による大学の再開で客員教授に復帰するが、昭和26年（1951）同大学を辞職して帰国し、昭和28年（1953）、東京にて死去した（82歳）。その際、日本人類学会、日本民族学協会、日本考古学会など6学会が合同葬をもってこの偉大な学者に弔意を表している。

鳥居の研究は草創期の人類学にふさわしく、広範で、自然人類学、考古学、民族学、民俗学の諸分野に及んでいる。諸民族の身体形質、言

語、文化、風俗など多様な問題を取り上げ、巨視的に研究に取り組んでいた。また、その調査活動も、国内各地はもとより、千島、樺太、東シベリア、満州、蒙古、朝鮮、西南中国、台湾、さらには南米ペルーにまで及ぶ。当時の国情、治安、交通事情などを考えれば、一学者の研究生活においてこれほど広範な地域にわたる調査活動が行われたことは驚嘆すべきことである。

このような鳥居の調査状況は当時の新聞でことごとく報ぜられ、かつ鳥居自身が極めて多作であり、さらに集会などを通して自身の研究を含む学問の普及、紹介に努めたこともあって、当時多くの日本国民が鳥居の調査活動に魅せられた。しかしその一方で、先駆者、パイオニアに対してしばしばつきまとう誹謗もうけている。鳥居の調査行は「学術的というより探險」であるとか、その巨視的な研究、調査が「鳥瞰的なおおまかさ」とか「概括的で時に粗策にさえ感ぜられる」という言葉で評価されることもあったようである。

鳥居は調査・研究生活のなかで膨大な著作を発表したが、学問的遺産はそればかりではない。鳥居の仕事として、おそらく永遠に命脈を持ち続けるであろうものに、調査中各地で収集した諸民族の民族資料並びに多数の写真資料がある。これらの資料は、今日諸民族の伝統的文化が次々と消滅、あるいは変容しつつあることを考えれば、人類学、民族学など様々な分野において非常に高い研究価値を持つものといえよう。

民族資料は国立民族学博物館に移管されたが、写真資料はそのまま人類学教室に残され、長らく死蔵されることになる。約20年前、当総合研究資料館が創設され、理学部2号館人類学教室に収蔵されていた膨大な標本・資料類は、当館に移されることになった。当時大学院生であった私は、主任教授鈴木尚先生から引越し作業を命ぜられ他の学生とともにその準備をした。その際、大量の写真乾板を箱詰めにして当館へ運んだ記憶がある。その後資料館の増改築のたびにこの重い数十箱の乾板はただ右往左往し標本室の片隅に放置されるばかりであった。

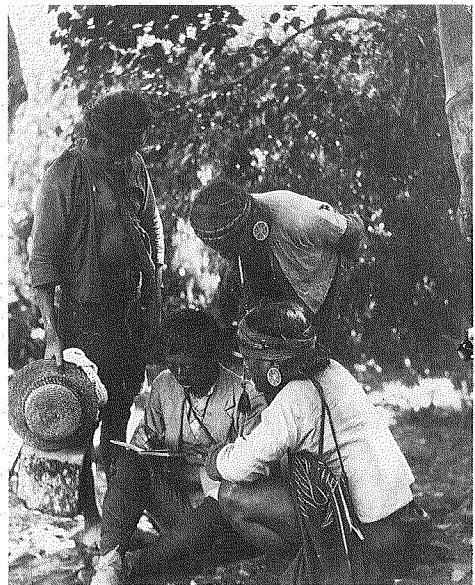
ところが、ある折に、東京外語大学アジア・

アフリカ言語文化研究所の飯島茂先生（現東京工業大学）にこの写真乾板のことをお話ししたところ、先生は強い関心をもたれ、数日後実物をみるために来館された。私は鳥居撮影と思われる写真乾板に関係する他の資料もおみせしたが、先生はますます強い興味を示され、同時にその重要性を感じられたようで、これらの乾板を再生することの必要性をこんこんと説かれた。その後しばらくして、飯島先生は末成道男さん（東京大学東洋文化研究所）を伴って来館され、その末成さんは土田滋さん（東京大学文学部）を、土田さんは姫野翠さん（昭和音楽大学）、中川裕さん（千葉大学）、笠原政治さん（横浜国立大学）を連れてこられた。鳥居龍蔵がかつて歩いた地域を専門とする、文化人類学者が次々と来館し、乾板資料を実見したのである。

かくして、鳥居撮影の写真乾板に引き寄せられた専門家たちは、当然の帰結としてこれらの乾板を再生し、その資料的価値を引き出すべく、プロジェクトを発足することになった。その資金として、文部省科学研究費補助金をうけることとなり、香原志勢立教大学教授を代表者とする研究組織が誕生した。課題名「鳥居龍蔵博士撮影の日本周辺諸民族写真乾板の再生・保存・照合」昭和63・64年度文部省科学研究費補助金総合研究（A）というプロジェクトのスタートである。

研究組織は13名からなる大組織となったが、この人数は一研究者の学問をカバーするには多いと思われる向きもあろう。もちろん組織の中には写真乾板の再生・保存作業を実施する写真技術の専門家や、資料のデータベース化を実施するために情報科学の専門家も入っている。それにを除いても、かなりの人数である。これは鳥居の調査が地域的にも分野的にも広範、巨視的であり、諸民族に関する映像資料を解説し、種々のデータを抽出する作業が今日ではそれぞれの地域の専門家をしてはじめて可能であることに起因している。

問題は写真乾板には一部を除いてほとんど記録がなかったため、研究者は自分の知識をもって写真を解説せざるをえなかった点である。写真に映し込まれた素材は、衣装、住居、生活用



台湾東海岸秀姑巒溪畔でアミ族を聞き取り調査中の鳥居龍蔵、明治29年（1896）撮影。

この年、鳥居は東京帝国大学が実施した台湾の動物・植物・地質・人類学に関する総合的な調査に初めて写真機を携行し、これがわが国において人類学のフィールドに写真技術が導入された嚆矢となる。

具などの物質文化、身体特徴、先史遺跡・遺物、宗教儀礼、舞踏などの芸能表現等、はなはだしく多種多用であった。これらすべてを解説することは各地域の専門家をしても容易ではなかったようである。しかしまた、それこそがこの鳥居映像資料が計り知れない潜在的価値、重要性をもつことを示していることにほかならない。

プロジェクトのメンバーがそれぞれの専門的視点から写真に写し込まれたデータを抽出する作業は終了した。抽出されたデータのなかには、あるいは撮影時に鳥居が意識しなかったものも多くあるかと思う。写真という写実的な映像資料であればこそ、視点の違いによって、撮影者の意図をこえた要素をも包含する資料となりうるのである。鳥居自身がこれらの資料をもとに生み出した著作・研究成果、並びにプロジェクトメンバーが抽出したデータのほかに、再生された写真資料から何かを引き出してくださる方がいれば、大変うれしく思う。

（本館文化史系資料室・助教授）

東京大学総合研究資料館特別展示

「乾板に刻まれた世界——鳥居龍蔵の見たアジア——」

のお知らせ

本館では、現在、上記の特別展示を開催しています。鳥居龍蔵博士は、本学理学部人類学教室の教官として、明治、大正、昭和を通じて活躍された日本人類学の草分け的存在です。また今日では当たり前になっている野外調査におけるカメラの使用を最も早く取り入れた研究者としても忘れることはできません。

撮影に使用されたガラス乾板は、理学部の人類学教室から本館先史人類標本資料室へと移管され、数年前より整理と復元のプロジェクトが進行しておりました。この度ようやくその作業が終了したことを記念して、成果の一部を公開する運びとなりました。

写真乾板はおよそ三千点にも及び、その内容は、鳥居龍蔵博士が踏破された日本、朝鮮、満州、中国南部、台湾というように多地域にわたっています。こうした一連の写真を通して、博士のアジア観を探究することができるだけでなく、現在では目にすることがかなわない生活様式や習俗を分析できるという意味で、高い学問的価値をよんでいます。

本展では、こうした学問的写真資料の持つ潜在的可能性を探り、この種の研究の立ち後れた日本での先駆けとしたいと願っています。なお特別展示の期間にあわせて、本館が例年行っております講演会を開催する予定であります。

○ 特別展示

会 期：2月2日（金）～ 4月30日（火）

10:00～16:00（土曜日は12:00まで）

日曜日および祝日は休館

会 場：総合研究資料館1階展示ホール

○ 総合研究資料館第37回講演会

本館では、例年行っています講演会を下記の

通り開催します。今回は、期日および内容を特別展示に合わせ準備しております。講演者の江上波夫先生は、本学名誉教授として、また古代オリエント博物館の館長として活躍され、鳥居龍蔵博士の業績、人柄を熟知された数少ない方であられます。

演 題：「鳥居龍蔵先生をしのんで」

講演者：江上波夫（東京大学名誉教授・古代オリエント博物館長）

日 時：平成3年3月23日（土）

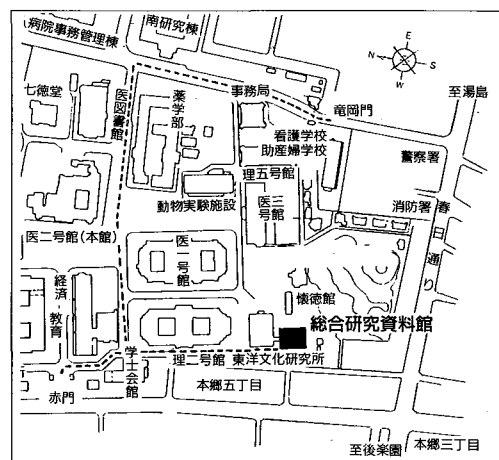
14:00～16:00

場 所：総合研究資料館講義室（下図参照）

03 (3812) 2111 内線2802

入場無料

案内図



○ 臨時休館のお知らせ

特別展示の撤収のため、下記の通り閉館します。

期 間：5月1日（水）～ 5月11日（土）

なお、特別展示の期間中は常設展示は休止となります。